須賀川市教育研修センター・教育支援センターだより　第139 号

「　み　ち　」

令和５年１０月１６日 発行

背中を押す言葉かけを！！

アメリカ大リーグで活躍中の大谷翔平選手が今シーズンのホームラン王になりました。日本人としてはもちろんアジア出身としても初めてのことだそうです。彼はずっと二刀流にこだわり、大リーガーになってもその夢を持ち続け、努力を重ねてきました。

大谷翔平選手本人の強い意志とたゆまぬ努力があってのことではありますが、彼をサポートしてきた多くの人々の理解と様々な環境整備などの支援があったことも忘れてはいけないのではないでしょうか。

子どもたちは、十人十色。一人ひとりそれぞれの環境の中で成長していきます。私たち教師は、子どもたちが夢を持ち続けられるよう、あきらめずに頑張り続けられるよう、励まし、支えられる大人でなくてはいけないと考えます。子どもたちの心に寄り添い、どんな道を進もうとも自力で強くたくましく生きていくように、背中を押す心のこもった言葉をかけ、次のステージに夢と希望を持たせてあげたいものです。

ドリームサポーターを目指しましょう！！

ドリームキラーになっていませんか？

＜ドリームキラーチェック！！＞

□子どもができることより、できないことを指摘してしまう。

□「無理なんじゃない？」「どうせできないよ」「それは不可能」と言ったことがある。

□他の子どもと比べてしまう。

□結果ばかりを気にして、取り組み方をほめてあげていない。

□前例がないから「やれない」と思い込んでしまう。

□子どもにはできるだけ苦労させたくないと思っている。

□「私の言うとおりにやりなさい」と活動を限定してしまう。

□「この子、だめなんですよ～」と本人の前で否定するような言葉を出したことがある。

「確かな学力の育成」に向けた授業改善の視点

①　「教える授業」から「考えさせる」授業に転換したか

- ○ 児童生徒に「真剣に学ぶ」姿が育っているか
- ○ 教師が一方的に指導していないか
- ○ 話し合い活動が発表に終始していないか
- ○ 学び合いが形式化していないか
- ○ 子どもたちの静かにじっくり考える時間を奪っていないか
- ○ 子どもと子どもそれぞれの学びをつないでいるか

②　授業改善の手立てを絞り込み、徹底したか

- ○ 努力しがいのあるジャンプの課題を設定したか
- ○ 子どもの実態に即した学びが展開できるような教材研究を進めているか
- ○ 男女混合４人（原則）グループやペアによる探究中心の場を設定したか
- ○ 「児童生徒同士の学び合い」を積極的に位置づけているか

③　学びの基盤ができているか

- ○ 教師と子ども、子ども同士の望ましい人間関係が構築されているか
- ○ 子どもたち一人ひとりを大切にしているか
- ○ 話を最後まで黙って聞くことができるか
- ○ 発達段階に応じた学びの作法が育っているか

《小学校陸上競技交流大会から》

コラム　学びと育ちの MI　《NO、03》

学びの世界は不思議な世界です。常識とは異なる姿があります。何かを記憶しようとする時、例えば歴史のテスト前に年号を覚えるために私たちは何度も声に出して繰り返したり、語呂合わせをしたり、連想を働かせたりします。よく覚える子どもたちがどんなふうに覚えているのか調べたブランスフォードという心理学者がいます。何度も繰り返す「強化」や言い換えのような「操作」、それとも「連想法」のどれが子どもたちに役立つのか、初めはそれを調べようとしたようです。「背の高い男の人が花火を買った」「お腹のすいた人がネクタイを買った」・・・といったそれ自体意味のない文章をたくさん読ませてどうやって覚えるのか調べました。

結果は意外なものでした。よく覚える子は「考えながら読む」子たちでした。ブランスフォードは自分なりに必然性を考えながら読む子が、単純に読み飛ばすよりは少し時間がかかるが着実に覚えるという結果を報告しました。例えば背の高い人がお店の棚の高いところにあった面白い花火をみつけて買った(のではないか・・・)と考えながら読む子たちがよく覚えるということです。

ブランスフォードは、このやり方を“Elaboration”と呼びました。辞書で引くと、洗練させる、吟味する、練り上げるといった意味の単語で、教育学では「精緻化」と訳されています。ブランスフォードはこのようなやり方をしている子たちは「読解力」が高いことも確認しました。そしてさらに驚くことに、このやり方を知らなかったり、やっていない子に教えると自分でもびっくりするくらい覚えられたりという実験を繰り返し、最後にこう結論づけました。これは能力の差ではない、やり方を知っているか知らないか、やっているかやっていないか、の違いだけだ、と。

4 人でよく聴き合っているグループを想像してみましょう。一人でするよりも、4 人ですれば“Elaboration”(練り上げ)は格段に進むでしょう。そして、このやり方を知っていなかったり、やってなかったりした子にも、そのやり方が伝わります。グループがつながっていれば、教師が一人一人に教えるよりもはるかによく一人一人が“Elaboration”ができるようになり、格段に“Elaboration”自体が進みます。つまり学びが進みます。そして、能力の差ではないというブランスフォードの指摘は、教育に携わる私たちにとても大切な示唆を与えます。

学びの世界は、一般常識や旧来の考え方を超える世界です。詳しく知りたい方は、認知心理学者佐伯先生の本を読んでみると面白いでしょう。ではまた。

計画訪問から気づいたこと。明日からの教育活動に生かしていきましょう。

今年度計画された教育委員会の指導訪問は 13 校。そのうちの 7 校が終了し、後半に入ります。そこでここまでの訪問で気づいたことをお知らせし、これからの教育活動の参考にしていただきたいと思います。

□校舎内外の環境、特に校舎周辺がきれいに整備されている。教室の棚やロッカーの中が整理されていることは大切。

□ほとんどの学級で、ペアや 4 人グループの形態で授業が展開されている。しかし、教師が「協同的な学び」について、十分に理解しないまま旧態依然の一斉授業が一部のクラスでは見られた。

□さまざまな行事等に積極的に全職員で取り組んでいる姿が見られた。次年度につながる反省記録簿も年度当初から準備されていて、効果的な取り組みである。

□校内で教室以外にも、子どもの居場所の一つとして校長室をはじめ図書室や保健室が機能している。

□授業研究や学力向上などの内容や具体的対策を全職員で共有することが大切である。組織的に機能できるよう経験豊富な先生方も若い先生方も日常的に教材や子どもの学びについて話題になるような職場環境がほしい。

離席する子どもがいたり、大きな声でおしゃべりする子どもがいたり、苦労が絶えないだろうと思われるクラスもありました。担任一人で背負わず、あきらめず、見放さず。他人事ではなく自分事としてみんなで取り組んでいきましょう。先生方もつながり合っていきましょう。